

## おわりに

丹後海のアカアマダイは数年の間隔で卓越年級群が出現し、それによって漁獲量の多寡が決っていると考えられました。一般的にこのような魚種では、資源の有効利用を図ることがとくに重要といわれています。それには、未成熟な小型魚の漁獲を避けること、また、漁獲物の付加価値を高めて出荷、販売することが重要となります。前者については、本冊子で述べました。後者については、現在、鮮度を維持し、かつ見た目の美しさを保つために、釣獲から出荷までの魚の取扱いおよび保管方法等がマニュアル化されています。このマニュアルにしたがい、300 g 以上のアカアマダイを対象に「**京** 丹後のぐじ」として出荷されています。しかし、消費地の卸売市場では、丹後産アカアマダイが独立的に扱われていないなど、産地ブランドとしての名前が十分に浸透していないのが現状のようです。したがって、「**京** 丹後のぐじ」が他産地に比べ何が違うのかを積極的にアピールするなどして、付加価値の向上に努めていく必要があります。

アカアマダイは海底に巣穴を形成して生活することから、大きな移動はしないといわれていますが、稚仔魚は数ヶ月の浮遊生活を送るため、かなり広範囲に分散することが予想されます。また、本種は若狭湾中央や東部海域でも釣延縄や漕ぎ刺網で漁獲されており、その漁獲量の年変動は京都府内のそれと同じ傾向を示しています。これらのことから、若狭湾のアカアマダイは同一資源であり、卓越年級群は京都府海域だけではなく、若狭湾全体で同じ年に出現していると考えられます。

京都府の釣延縄によるアカアマダイ漁業の現状としては、恒常的に未成熟な小型魚をたくさん漁獲しているわけではなく、産卵に必要な親魚も残されていると考えられたことから、適正であると判断されました。ただし、漕ぎ刺網では体長 15 cm 前後の小型魚の漁獲がみられており、とくに卓越年級群が出現した場合にはその傾向が顕著となっています。アカアマダイ資源を持続的に利用するためには、今後は漕ぎ刺網を含めた若狭湾全体での資源の利用方法を検討することも重要と考えます。